

西真寺 寺報

令和二年 夏号

住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念仏相續に御精励のことと、お喜び申し上げます。

新型コロナウイルスの脅威は、世界を席卷し、私たちの生活を脅かし、いつ自分が感染するか分からない不安な中、感染した場合は死をも覚悟しなければならぬ恐れに怯えています。

また、いつ日常生活が取り戻せるのか、という苛立ちから我慢の生活を送り続けています。

そんな苛立ちの憎悪感情を家族に向けたり、SNSで誹謗中傷の言葉を特定の人に浴びせたり、自粛の中営業する飲食店に嫌がらせをするなど、正義の傍観者の立場に居たがる風潮があります。

排他的な風潮は、今に始まったことではありません。自分の身が脅かされる不安から、防衛反応が発現し、自らの影をも相手にぶつける、投影する「甘えの構造」が根本にあるからです。

テレビ視聴から始まったメディアの発達と、科学の発展により、自らが傍観者に成りえる世界観が広がりました。その結果、私達は、主体性や当事者意識、つまりは相手の立場に立脚する視点を失い、相手を切り捨て排除する「実驗者」「処刑執行人」が多く存在する社会を創造してしまいました。

こんな末法の時代であるからこそ、「世の中安穏なれ」という、親鸞聖人の言葉が胸に響き、「人を切り捨てる社会」よりも「人を生かせる世界」の創造を強く願うこの頃であります。

南無阿弥陀仏

釋直徳

■影を内に観るか外に観るか⑥

4. 「投影の引き戻し」 自覚者の言葉

仏教では、無我すなわち空として、分別を超えたところに本来あるべき生き方があると主張しますが、人間の自我は死ぬまで消滅することとはなく、除去することはできません。

しかしながら、自力無劫に至り、自我の力が弱まり、自我を中心としない、本来のいのちのはたらきを知ることが、ユングと親鸞がその生き方で示してくれます。

別の言い方をすれば、生きながらにして非我（自分本位の生き方に気づく）の状態から、初めて生かされているいのちとの出遭いが成立するのです。

あまりにも自我のみ強調する、現代の科学的な合理主義や市場原理に基づいた「今だけ、金だけ、自分だけ」という思想からでは、本来あるべき大いなるいのちのはたらきを知る「気づき」には至りません。

光と影、善と悪、生と死を意識の世界として分けて捉えても、無意識の深淵なる世界では、二分した世界観を統合するはたらきがあります。片方（陽の部分）に執着し、苦を創造するより、二項と対峙する能力を養うことに、全体性を生きる意義が見出されるということす。

私たちは、自分の影・穢悪に対し逃げずに常に向き合う、抱えて生きたければならない存在です。なぜなら闇に先立つ夜明けは訪れないからであります。

「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」（『歎異抄』）

『われらは、ここにあって死ぬはずのものである』と覚悟しよう。このことわりを他の人々は知っていない。しかし、このことわりを知る人がいれば、争いは静まる。」

（『ブツダの真理のことば感興のことば』）

善悪や生死の分別の心から離れる生き方を知ること、少なくとも戦争をやめることができる歩みが始まるのではないでしょうか。我々は、影を外に観る「外道」に生きるか、影を内に観る「内観道」を生きるか、そのことを先覚者から、今問われているのです。ユング派の心理学者ジェイムス・ホリスは次のように述べています。

「影」のワークに求められるのは、世界で起きている過ちは同時に私たちの内面にある過ちでもあると理解することである。共通の条件、共通の欲望、そして共通に陥りそうな誤りを共有しているのだという認識があると、私たちは相手を傷つけたり、周囲の人を見下したり、敵を憎んだりしなくなるものだ。（中略）私たちが「他者」の中で嫌いな部分は、自分自身の嫌いな部分なのだ。（『影』の心理学―なぜ善人が悪事を為すのか？―線筆者）

本来あるべきいのちからの本当の願いに耳を傾け、光と影の統合の仕事を果たすことは、人類における普遍的問題に関わり変容する機会を与える唯一の生き方を創造する。ジェイムス・ホリスと同様に親鸞とブツダは「鬼（影）は内」と問いかけ続けるのです。

龍樹の「戲論」（けろん）における薪のたとえがあります。薪の炎は、体も心も温め、なお火を囲む人間同士の輪を作ります。その反面、火力は四百度を超え、火力の強さに圧倒され、全てを廃にしてしまう底知れぬ怖さも秘めています。

もちろん種火（原因）と炊き上げの木材（縁）がなければ薪は燃えません。条件次第（縁起次第）で人間は、煩惱を自覚しないまま、正義による殺人、戦争を繰り返した後の廢墟を生み出します。

炎の持つ激しさは、怒りの炎と成り、人間の煩惱の怖さを映し出してくれますが、人間は智慧によって照らされることよってのみ、その激しい炎、煩惱を自覚するのです。仏により護られている環境とは、安全で温かく包む器（炉）のはたらきです。私達には、炉の中の炎を制御する力は無く、仏のはたらきにより制御されていることを忘れてしまします。

いつの時代でも普遍的に「今だけ、金だけ、私だけ」（現代版の三毒）という考えが、悲劇の要因や世界中で起こる「過ち」を作り出すのです。我々には、人間が持つ本質を理解する為に、「鬼は内、福は内」という自分が抱える影と向き合う姿勢が必要なのです。

我々は外を観て苦しみ、仏さまは内を観て、薪の炎のような性質を持つ我々に必要な智慧を、常に示してくれているのです。（終わり）

■神道と仏教の関係⑤

7. 神道と仏教の関係性で見えるもの

河合隼雄は、『自分にとって悪と見えていたひとの行動のなかにそれとは違ったものを見出すに相違なく、このときに投影のひきもどしが行われるのである。このようにして、われわれは、自分のコンプレックスを認知するのであるが、この、「投影―投影のひきもどし」の過程において、コンプレックスのなかに貯えられていた心的エネルギーは、流れ出て建設的な方向へと向かってゆくことになる』と述べています。

悪いこと、嫌悪感(色)を全て他者や近隣諸国に投影する行い(行)の前に思考(想)の段階で立ち止まり、投影のひきもどしをする姿勢を生む貯蔵(識)こそが、苦しみの無い目覚めの生き方につながり、建設的な方向に向かってゆくのではないでしょうか。

我々日本人は、多様なコンプレックス(本来劣等感という意味ではありません)があるからこそ、他人をスケープゴート(生贄)の対象として投影し「差別」し、攻撃するのです。

言い換えれば、感情に支配されている人間の要素が生んだ「五蘊」(注)による執着心が、人間の気づきを妨げてきた宗教観と成り、今も「祓う」を基にした情動的排他行動が「盛苦」として存在する理由なのです。

これが、古代より現代にかけて残されてきた負のスパイラルです。

将来を担う子供たちに、塵(苦)を祓い、一時的な安心を与えても、塵(苦)は必ず元に戻ります。後戻りできない苦しみを残さないように、我々が、主体的に目覚めなければならないのです。(終わり)

(注)五蘊とは、色(感覚)、受(感情・感性)、想(観念・思考)、行(意志・反応)、識(無意識)の五つの、私を構成する心の要素を示します。

■「私は、神様も信じていますが、それではいけないですか」①
—親鸞の神祇不拝を学ぶ—

1. はじめに

—ご門徒さんの連続研修会一年目の最後の問いが「私は、神さまも信じていますが、それではいけないのですか」という内容でした。

私はある班の担当として、話し合いの進行とまとめ役をしました。ご門徒それぞれが、ご自分の生活の中での神と仏の棲み分けから考え方までについて述べて頂きましたが、議論が深まらず自分でも不甲斐ない結果として、とても残念な気持ちになりました。

それは、皆さん方の考えや意見を聞きながら、仏教に共通した部分を取り上げて共感する方が見つからなかったからです。私に取り仕切る能力が無いことよりも、明治以降、国家の政策による神道の統治力が考えていたより、門徒の皆さんに共同体意識として強く根付いていたからでもあります。

門徒の代表である研修会の会長さんが、このような問いがあること自体、み教えが伝わっていない証拠だとおっしゃっておられました。私もその通りだと思いました。しかし一方で、そもそもお釈迦さまが原点なのになぜこんなに宗派が分かれているのが問題であり、親鸞が息子である善鸞を義絶したこともその一例である、という研修会OBの意見もありました。

また、「穢れを祓う」神道の中心思想に対して、仏教には排除する考えは無く、不二(分別しない)の思想であると説明したところ、仏教の教義を立てて、対立をおおる考えを持っていると受け取られる方がおられ、だから宗教は戦争すると指摘を頂きました。

結果的に、仏教に対する不満や宗教に対する不信感まで、話が大きく飛躍して冒頭のテーマに戻ることが出来ずに終了してしまっただけです。一方で、**仏さまの信仰は主体的要素が強く、神様の信仰は、地域の枠組みにおける全体性の輪が強調されていました。**

宗教はきな臭いとか、宗教で世界の紛争は起きているという意見は、

表面的にはそうですし、民族紛争もカルト集団に関しても教団が持つ構造上の問題でもなく、宗教の問題と片付けられるのが現状です。

しかし、仏教は、不殺生を説き、兵を立てず、怨みの連鎖を断ち、自他のいのちを大切に生き、いのちを生かす慈悲と智慧の教えです。『法句経』では「怨みは怨みによって果たされず、忍を行じてのみ、よく怨みを解くことを得る。これ普遍の真理なり」とある通り、決して紛争を起こす内容の教えでは無いのです。

戦争を他人事として、また、宗教のせいにして議論する我々が学ばなければならぬことは無いのでしょうか。

宗教が持つ罪悪の結果が戦争である前に、人間の本質が罪悪であることに気づいた歴史上の人物が、親鸞聖人であります。また、一番権力者に依らない仏教者も親鸞聖人です。

この歴史的背景とみ教えを前提とした意見が、研修会会長のみだったことに対し、私自身ショックを受けたことが残念な気持ちの本質にあります。私はこれまで戦争と宗教あるいは仏教との関係を命題として、仏教者として責任をもって臨んできました。

実際に、なぜ宗教が関係して戦争が起こり、血みどろの歴史が続いたかは、僧侶のみならずご門徒と共に考えていく問題であり、宗教だけにこの問題を押し付けても、戦争の問題は解決できません。なぜなら、本来の宗教の教えは、人を殺さないための教えが基本にあるはずです。仏教はそのなかでも安穏なる世界観を持ち、浄土真宗は特に、平等社会の実現や自他ともに共有できる救済観を持っています。

それならなぜ、本願寺教団は石山合戦で信長と十年間戦い、一向一

揆においても百姓（この時代では商人と職人も含まれる）の門徒衆が権力と戦ったのかという疑問があります。

また、北陸門徒による一揆を戦争と考えるか、民衆による独立運動と捉えるかは議論が残ります。最初に一向一揆について考えてみたいと思います。

私たち門徒の課題として

- ① なぜ本願寺教団は石山合戦で信長と十年間戦ったのか？
- ② 一向一揆においても百姓（商人と職人も含む）の門徒衆が権力となぜ戦ったのか？
- ③ 北陸門徒による一揆を戦争と考えるか、民衆による独立運動と捉えるか？

この三つの問題について検証したいと思います。

初期の一向一揆は、浄土真宗の「講」から始まったと言われますが、

当初は「信心を讃嘆する寄り合い」さんたんであつたはずが、自分たちの生活に対する不安から不満に対する「社会全般の寄り合い」活動に変化してしまいました。この集団の変容により、蓮如上人が望む「世間の沙汰をしない講のあり方」とはかけ離れた集団となり、内部抗争につながっていったことは確かであります。（次号につづく）

■西真寺 令和二年行事のご案内

村上門徒会同朋の会「聞法会」六月から十一月と三月の二十五日

西真寺住職による法話計七回 延期

報恩講 十月十二日（月曜日）住職と役員のみのお勤め